

未満児から幼児に至る接合・接着用具操作における発達調査

大阪芸術大学短期大学部 保育学科 教授 山本泰三

本研究は、未満児の保育において道具を使用する必要がある活動時に、対象児が見せるモノと道具との操作方略を統合していく過程について、環境からの刺激との関係も加味して調査することを目的とする。

そこから得られた知見により、発達の視点と環境からの個別支援方法の統合という新たな方法論を考察し、教員保育士養成課程での「対象理解と保育方法」の並行提示の効果構築を目指す。

〔研究の学術的背景〕

未満児における「道具・巧緻性」に関わる研究分野は、主に「食行動の自立」という視点から探求していく状況が多い。これは、保育学や発達心理学において食事という実際の「場面」で展開される子どもの行動や大人とのやりとりを目的に着目する事によるものと考えられる。

外山・無藤（1990）は、それを熟達した大人と未熟な子どもとのやりとりの活動と捉え、子どもが食事に付随する文化を習得していく過程と述べている。しかし、未満児の発達段階においても物と関わる表現活動は言葉や身体のと共に常に常発現されている。また描画の発達過程を見ても「乱打打ち」書きから、手首を水平方向へ、また自身から前後方向への往復運動へも可能になり、その二つを組み合わせた「スクリブル」へと進化している。「人間の上肢にある肩、関節、肘関節、手関節そして指の関節が持つ、「冗長な自由度」は、上肢運動の制御を難しくするだけでなく不定性を引き起こすが実際には、自由度を減らして正確な動作を行うようになっている。」（鈴木, 1991）。

すなわち糊付けの手指制御はこれに重なる。しかし現場で必ず指導されるであろう行為に關しての調査は、接合道具「糊・セロテープ」に關しては、実証検証を伴うものは皆無と言っている。今更ではあるが、保育活動では乳幼児の心身発達を保証するためにも物と関わる生活を環境化する必要がある。「生物の個体成長は進化の過程を繰り返している」の根拠に準えるなら、進化の環境には個体単体ではなく、個体同士の関係性の方略があった。

知見だけでは保育の場における個体同士の関係性の方略に還元不可能である。知見・方法論一体となった「対象理解と保育支援」に答えられる、学問的研究が必要である。

すなわち、保育士養成課程において、保育者当事者サイドからの対象者理解として、

- ・多くの現場で未満児の表現活動に一般化している道具の操作発達を実証検証する事。

- ・未満児個人の発達を保育士の支援方法や什器、素材などの環境と共に評価する事。

等の内容が、より現実的な実践的理解の構築に繋がると考えられる。

つまり、発達と支援方法の統合という新たな方法論を考察し、「対象理解と保育方法」の並行提示の効果構築によるカリキュラム化を目指す事が求められているといえる。

〔目的〕

- a) 乳児から続く物との関わり遊び（感触愉悦）から（操作愉悦）が発生する時期やその経緯について

- ・出生直後の主たる外界認知探索器官である、体表面の感覚点を色々な触覚刺激で満足させていた行為が、その後の一連の循環認知の発達により生じた外界探索の行為結果による巧緻性獲得に至る経緯は、個体差に関係なく普遍的な流れであるのかという事を確認する事。

- b) 接合する道具や切断する道具操作、契り行為の発達について

- ・糊付けや紙契り、ハサミ切り等の発生の必要性と操作発達のステップを探る事。

- c) 操作技術の獲得に至る近接領域の確認と、その支援環境

- ・保育室内の什器と身体的位置関係等の物的環境や、保育士の「言葉がけ」内容・タイミング、「見本行動」等の人的環境の効果を確認する事。

〔方法〕

- ・多様な保育現場の、0歳児（6年保育）クラス・1歳児（5年保育）クラス・2歳児（4年保育）クラス、において、保育全般の長時間にわたる活動を、保育者・ものの環境・対象者との状況を意識して一年間にわたり音声映像録画し、個別に時系列で上記「a）b）c）」に關する項目を設け、整列分析する。

〔結果・考察〕

- ・目的a）と目的b）について

0歳児（6年保育）クラスでは、入所2ヶ月あたりからほぼ全員が同様の流れを見せた。（8ヶ月～）風船など視野の直近に入ったものを獲得しに移動しようとし（寝返り、這い這い等）、四指で握持し口に入れ（感触愉悦）以後、開閉を繰り返し、振り回し解放する。探索対象が棒状のものから平板状のものへ、四指以上のサイズへと興味が移り、拇指対向へと誘われ、把握の機能が発展する。1歳児（5年保育）クラスへと引き続くと、20ヶ月辺りからピッキングとインサート活動などの微細運動へと、姿勢の獲得、視力の発達等が伴い、興味の対象が広がりを見せる事と相まって、進行していった。それに伴い、25ヶ月辺りから、前述の物を移動させる行為への反復操作のプロセスへの興味から、容易な変形（紙を握る、契る）といった、対象物への操作行為の結果への興味が多くなった。2歳児（4年保育）クラス、その結果、加工機能を持つ「道具・用具」への目視が高まった事が確認できた。結果、35-40ヶ月辺りでハサミの切り落とし活動では愉悦性を持って行った。同時に物の操作も巧みになり、持った物を手首の曖昧な上下運動で別の対象にあてがう行為も可能であった。

- ・目的c）について

0歳児（6年保育）クラスでは、保育士による誘う関わりや、出会いのイベント性を重視した物や子どもの導線への配慮がないと、活動そのものが生じにくい事を見せられた。同様の状況は、物や言葉掛け内容は発達とより異なるが、1歳児（5年保育）クラス、2歳児（4年保育）クラス共に通じる事を確認した。